十年後

不可思議

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
十年後

【Ｎコード】
Ｎ１２７３Ｍ

【作者名】
不可思議

【あらすじ】
コ哀です。哀が目覚めるとそこは十年後の世界だった。夢か幻か。哀は戸惑いながら不思議の世界でさ迷う。

1．始まり（前書き）

きちんとまとまるか心配ですが、初めての連載です。褒められて調子にのりました…。
話全体は哀目線です。

1. 始まり

意識が浮上して目を開けると、見覚えのない高い天井が見えた。
消毒液の匂い。
遠くで人の声がする。
上半身を起こすと、

「・・・・痛っ」

後頭部に痛みが走った。

「保健室？」

何故、保健室で寝ている事になったのか。まるで思い出せない。
痛んだ後頭部を触るとこぶが出来ていた。

「何かにぶつかったのかしら？」

ベッドから起き上がり辺りを見回す。やはり違和感。
確かに保健室なのだが、いつもの小学校の保健室ではないみたいだ。
窓から風が入ってきて、カーテンを揺らす。
外には校庭が広がっているのか、人々のにぎやかな声が聞こえる。
そういえば…目線が高い。

「・・・・・え？」

小さな鏡にちらりと写った自分を見て固まった。

そこには懐かしい成長した自分がいた。目も鼻も口も輪郭も大人び

た表情。
手足はスラリと伸び制服らしきものを着ている。

（戻っている…。どういうことかしら）

ドアを開けて部屋から出る。廊下が長く続いている。
やはり見覚えのない建物だ。
学校だということは解るけれど、いつも通う小学校ではない。
窓から外を見ると、哀と同じ制服を着た数人の男女が歩いていた。

（高校生くらいかしら？）

そういえばこの制服、何処かで見たことあるような…

「哀！」

明るく元気な声が哀を呼んだ。
真ん丸の大きな瞳。少し低めの鼻とかわいらしく白い歯を見せて笑う口元。
黒髪のボブカットがとても似合っている。

やはり制服を着て健康的な足を出し、こちらに小走りで向かってくる。
トレードマークのカチューシャはないけれど…

「…吉田さん？」

1．始まり（後書き）

何処で区切ればいいか、よく解らない…。

2. 歩美

「…吉田さん？」

少女は丸い目を更に大きくして立ち止まる。

「やだ！何よそれ？」

「え？」

人違いか…と思った途端、肩を叩かれて笑われた。

「急に苗字で呼ぶからビックリしちゃった。何の冗談？」

ニヤリと笑い、顔をのぞかれる。

「冗…談？」

「でも懐かしいね！小一の頃はそうやって呼んでいたっけ。灰原さん。吉田さん。って」

昔を思い出し遠くを見つめ、楽しそうに笑う少女は、輪郭も顔つきも大人にはなっているが、あの頃と同じ純粋でキラキラした目をしていた。

（本当に吉田さんなのね）

「あの時、哀ちゃんて呼ぶのに悩んだんだよ。今じゃ普通に哀って呼び捨てだけど」

太陽のような明るい笑顔を向けられ、思わず哀も笑顔になる。

（これは一旦どういうことかしら？夢？でもみているの？）

ふわふわとした気持ちで歩美と並んで歩きだす。
歩美は、今終えたばかりの委員会でのエピソードを話すのに夢中だ。
女の子の話に取り留めはない。

いくつかの話の内容からここは帝丹高校で、１０年後の高校２年生だということが解った。
だから見たことがある気がしたのだ。
今、哀が着ている制服はあの人が着ていたものと同じ。
お姉ちゃんに面影が似ているあの彼女。
そういえばと哀は歩美を見る。
１０年後（という設定）の少年探偵団と一緒なら当然・・・・

「皆いるかなー」

歩美は立ち止まると目の前のドアを開けた。
気がつくといくつかのドアが並んだ部室棟に来ていて、歩美の開けたドアには
『探偵倶楽部』
と、書かれている。

「やっと来ましたねー」

「おっせーぞ。待ちくたびれて、腹減っちまったじゃねーか」

低い男の声がして、開いたドアの奥に２人の人物が座っていた。

2．歩美（後書き）

話が進まない…

3．探偵倶楽部（前書き）

コナンはまだ出てきませんが、あくまでコ哀です。

3．探偵倶楽部

狭い部室には真ん中に大きなテーブルがあり、いくつかの椅子がある。
奥のホワイトボードには活動内容や、報告などが書き込まれている。
棚には変装グッズや探偵に必要あるのか疑問な備品などが綺麗に並べられていた。
1番奥に座る巨体の男が腹減ったとお腹をさする。
手前に座った細く背のたかい男が立ち上がり

「何言ってんですか！さっき菓子パン食べてたじゃないですか！」

と抗議した。
髪型が多少違うものの、二人とも幼い頃の面影を残している。

（小嶋くんに円谷くんだわ）

「ゴメンね。ちょっと委員会が長引いちゃってさ」

ペロっと可愛く舌を出し手を合わせる歩美に、2人は集中する。

（吉田さん小嶋くん円谷くん…今いるのは私含めて4人ね。このクラブ他に何人いるのかしら…？彼は…）

「歩美ちゃんは解りますが、灰原さんはどうしたんですかー？」

「まだコナンも来てないぜ」

元太は後ろ脚に体重をかけ椅子に悲鳴をあげさせている。

やっぱりいるのね！と哀の目が開く。
この設定だと工藤くんもいるだろうと予測していた。
「またサッカー部にでも呼ばれているんでしょうか？」
子供の時、特徴的だったそばかすはだいぶ薄くなっている。
「まーた女の子に告白されてるんじゃない？」
3人は次々と、この間は隣のクラスの…と告白してきた女生徒を報告しあっている。
小さくなる前の彼を、見たのは数回だ。
工藤新一という人物が江戸川コナンとしての生活をしている時、何度か元の姿に戻っている。
高校二年生と言えばちょうど元の年齢だ。賢くルックスのいい彼はさぞモテるであろう。
江戸川コナンとしての彼の姿はどうなっているのだろうか。
心なしか心臓の鼓動が、はやまった気がする。
（夢か幻なのに何を緊張しているのかしら？）
フッと自重の笑みがこぼれた。
「あー、哀。もしかしてヤキモチ妬いてる？」
「「え？」」
元太と光彦が驚いた声をあげた。

「は？」

哀が意表をつかれ呆れた顔で首を傾げる。

「哀、カワイイ」

と歩が抱き着いた。

「灰原でも妬くんだな」

「ええ、初めて見ました」

「そりゃ恋人がモテモテなら心配しちゃうよね」

にっこり笑う歩美の言葉に、哀の思考が停止する。

今歩美はなんて言ったのだろう？…コイビト…？

「でも心配する必要なんてないじゃないですか。誰がどう見ても、コナンくんは灰原さんにしか興味ないんですから」

少し呆れたように片目をつむって腕を組む光彦。

「だよなー。むしろ灰原に告ってくる男を片っ端から追い払ってるようなコナンだぜ。あいつ小さいよ」

という元太に、慌てて光彦がたしなめる。

「それは言っちゃ駄目って言われてたでしょうが！」

元太が口塞いでももう遅い。

なんと言う夢なんだろう？

この世界で哀はコナンと付き合っているらしい。

頭がクラクラする。

これは自分の心の奥の願望なのだろうか？

眩暈を覚えた哀の後ろでドアが勢いよく開いた。

「ここにいるのか哀！！」

3．探偵倶楽部（後書き）

難しい。連載は難しい。

4．恋人の江戸川コナン（前書き）

やっとコナンが登場です。

4．恋人の江戸川コナン

変声機でダイアルを合わせた時、元の姿へ一時的に戻った時、何度か耳にしていた工藤新一の声だ。
高まっていた鼓動が更に跳ね上がった気がする。
恐る恐る振り返る。

「え…」

視界が遮られ顔を胸に押し付けられる、暖かい体温を全身に感じた。

「良かったー！無事だったんだな」

コナンに抱きしめられていた。
走ってきたのだろう、汗をかき息が乱れている。
コナンの腕の中で哀は動けずに固まっていた。
もう何がなんだか解らない。

ホッとしたようにコナンが息を吐くと、哀はハッとして上を見上げる。
工藤新一その人が目の前にいた。
コナンなので相変わらず眼鏡をかけているが、工藤新一そのものだった。

（この人が江戸川くん）

そのコナンが哀の頬を優しく掴むから、また哀の心臓が跳ねる。

「心配したんだぞ。急にいなくなるから」

ゾクッとした。コナンが愛おしい目で見つめるからだ。
今まで一度だって、コナンにこんな目で見られたことなんてない。
本当にこの人は江戸川コナンなのか。

「頭平気か？」

大きくなった手で哀の頭を撫でる。

「いきなり来てイチャイチャすんなよ」

野太い声が二人の世界を遮った。
はっと気がつき身を離す。
顔が熱い。心臓が持たない。

「ねえコナンくん。大丈夫ってどういうこと？」

と歩美が顔を赤くしたコナンに聞いた。

「頭平気かってどういうことです？」

光彦も聞いた。

「ああ…」

コナンが気を取り直して説明を始める。

放課後いつものように部室に集まる予定だった探偵団。
サッカー部に声をかけられ夢中になって球を蹴っていたコナンを、
哀が呼びに来た。

その時、野球部のボールが飛んできて頭に直撃。
哀は気を失ったというのだ。
いそいで保健室に運び、保健医を呼びに離れたところ、戻ってきたら哀が消えてビックリしたのだという。

（何と言うマヌケな設定かしら？）

哀は思ったが、口にも表情にもはださなかった。

「ええー？それは大変だよ。哀大丈夫？」

と歩美達が聞く。親友に大丈夫よと答える。

後頭部に触れられピリッと痛みが走った。

「でもたんこぶ出来てるな。本当に大丈夫か？」

また近づいてきたコナンに、哀は思わずビクッと身体を離してしまう。

「・・・・哀？」

「大丈夫よ」

思わず顔を背けてしまうと、コナンの顔が曇った。

「今日部活パス」

コナンが皆を見回し帰るという。
光彦がいち早く反応して答えた。

「そ、そうですね。灰原さんゆっくり休んで下さい」

4．恋人の江戸川コナン（後書き）

書き溜めてあったので一気に投稿してみました。
この後は遅くなるかもしれません。

5．彼女の行方

常に心配そうに哀を見ているコナンとの帰り道。
黙りこんで二人並んで帰るのに、違和感を感じるのは微妙な距離のせい。
目覚めてからの哀は少しおかしいとコナンは思っているが、哀には解らない。

目線が高くなって、街の景色が広く見えるような気がすると哀は思った。
子供目線ていうのは視界が狭い。
１０年経った設定らしいので、街には高いビルが増えた。
いくつかの馴染みな店が無くなり新しくなっている。
博士とお気に入りで買っていた珈琲豆の店も無くなっていた。
細かい夢の設定に少し興味を持って、哀は街の景色を見てしまっていた。

（そういえば、この世界で私や工藤くんは何処に住んでいるのかしら？）

恋人というコナンが今から送ってくれるだろうが、自分はまだ博士のところに住んでいるのだろうか。コナンははまだ探偵のところに…

（…蘭さん！蘭さんはどうなったの？）

考えこんでいた哀が立ち止まったので、コナンはまた心配そうな顔をした。

「哀、本当に大丈夫か？」

さっきからその呼び方に抵抗を感じると哀は眉をしかめた。
しかも自分を見る優しい目は、なんとなくコナンらしくない気がしてむず痒い。

（まあ、私と付き合っている設定ってのがおかしいのだけれど）

「哀、やっぱり病院に行ったほうが」

「ねえ！」

哀はまっすぐコナンを見る。
コナンも哀に向き2人で見つめあう形になった。
「ガキが街中でイチャついてんなよ」

「小五郎のおじさん！」

１０年の歳月により少々老けてはいるものの、あまり変わっていない冴えない毛利小五郎が立っていた。
競馬の帰りなのか新聞と鉛筆片手にしている。

「久しぶりだな」

「はい。ご無沙汰です。お元気そうですね」

久々に会った親戚のように話すふたり。
ということは、コナンは探偵事務所には住んでいないのか。

「まー。ぼちぼちやってるよ。それよりたまには顔出せよ」

「すみません。近いうちに遊びに行きますよ。蘭ねーちゃんは元気ですか？」

哀はハッとしてコナンを見る。蘭さんは今何を…

「元気だよ。今は子育てで大変みたいだけどな」

（子供？蘭さんは結婚しているの？）

コナンを見ても何も動じていない。

哀と恋人という設定なので、蘭のことはもう過去で終わっているのかもしれない。

でも…。

夢とは言え後味が悪い。

２人を引き裂いた張本人が恋人になっている。

胸がチクチクする。

この夢から早く抜け出したい。

哀はそう思った。

5．彼女の行方（後書き）

哀ちゃんが少し諦めモードですが、あくまでもコ哀です。

6．優しさが切ない（前書き）

少しアダルトな描写があります。

6．優しさが切ない

どうやらこの世界で、哀はコナンと共に工藤邸に住んでいるらしい。
立派な門を開けて、玄関に向かう。
隣の博士の家は何も変わってないように見えた。
コナンに促されて家の中に入る。
相変わらず豪華で大きな家だ。

家中を見渡せば、そこかしこに2人で暮らしている跡が見てとれた。
リビングにはいくつかの写真の中に、コナンと哀が2人幸せそうに写っている写真があった。

哀はため息をついて、ソファーに座り改めて周りを見渡す。

（長い夢ね…いつ目覚めるのかしら）

・・・・え？
腕を引っ張られ突然後ろから抱きしめられた。
新一が力強く哀の身体を包みこむ。

「無事で良かった」

心臓がまた跳ね上がる。

「・・・・あ・・・・あのっ」

首を横に向けると、唇に暖かい感触を感じた。

（う・・そ・・・今の）

優しい顔で哀を見るコナンの顔が、息が触れるくらい近い。
心臓が飛び出しそうなくらい勢いがついている。

「倒れた時、心臓が止まりそうになった」

あの時汗だくになりながら捜してくれていた。
本当に哀の事を大事に思っているのだ。
コナンの感情を感じて切なくなる。

「ご、ごめんなさい…」

コナンが抱きしめる腕に力をこめ哀を見つめる。今、自分のほうが心臓が止まりそうだと哀は思った。
離してという前にまた唇を塞がれる。
今度は先程の軽く触れるだけではなく、深い大人のキスだった。
哀は頭が真っ白になって、抵抗も出来ずにいる。

（工藤くんとキスをしている）

信じられないことなのに、哀は目をつむって受け入れていた。
夢の中の別人なはずなのに嫌じゃない。
心の奥から何かが込み上げてきて、涙として溢れだす。
何度も優しく唇を吸われて、身体が溶けていくような気持ちになる。

（…愛してる…）

コナンの唇が頬や耳、首筋に移動し、右手が哀の膨らみに触れると、流石に哀は意識を戻した。
コナンの腕を押しのけ逃げ出す。

「・・・・哀？」

怪訝な顔になるコナン。
一緒に住んでいるなら、キスもその先も当たり前なことだろう。

「…待って…まだ…頭が痛いの」

流されて最後までしてしまいそうだった。
でも、これ以上は無理だ。
いくら夢でも自分はそこまでは望んでいないはずだ。

「そっか…部屋で休むか？」

新一は気分を害した訳でもなく、哀の髪の頭を撫でた。
そして、部屋に向かおうと階段をのぼり始める。

「…ごめんなさい」

哀が小さく謝ると、振り向き優しく笑って手差し出す。
胸が少しきゅんと切なく鳴る。
このコナンは優しすぎる。
哀は恐る恐る手を取る。
そのまま手を引かれ、沢山のドアのうちの一つの前に立った。

自分らしいシンプルな部屋だな、とドアを開けて哀は思った。
多少女らしくなってはいるものの、浮いたものはほとんどない。

「哀？」

ぼんやりしていると思ったのか、コナンが声をかける。

「ありがとう」

哀は繋いだ手を離し、笑顔でドアを閉めた。
馴染みのないベッドに倒れこむ。

震える手で唇に触れる。
まださっきの熱が消えない。
哀は大きくため息をついた。

6．優しさが切ない（後書き）

うーん。難しくなってきた。

7. 決戦前夜

「眠れないのか？」

深夜のキッチンで水を飲んでいると、後ろから少年の声がした。
少女はコップを両手で握り力をこめる。

「ええ…あなたも…でしょ？」

「ああ」

薄暗い深海のような静けさが二人を包む。
コトンとシンクにコップを置いた音が響く。
小さな水滴が蛇口から一粒落ちた。

「怖いの」

少女は自分の腕で自分を抱きしめるように震えた。

「こんなに怖くなるなんて思わなかった。臆病よね、私は」

闇の中に自重の笑みがこぼれる。

「俺も怖いさ」

少年は静かな落ち着いた声でそう言った。

「明日には何も無くなっているかもしれない。生きて帰って来れないかもしれない」

少女の喉がなる。現実を叩きつけられたような気がした。
この少年を巻き込んではいけない。

「あなたは行く必要がないわ。いいえ。行かないで頂戴。私一人で充分…」

「バーロ。一人で行かせられるかよ。それに…約束しただろ？守るってやるって」

少女の目が揺らぐ。
少年は真っ直ぐ少女を見つめ優しく言った。

「オメーを絶対守ってやっから」

「…」

「な？」

「…うん」

初めて少女の口角が上がった。
よし、と少年は手を差し出しそのまま少女の手を繋ぐ。

少年の部屋の前まで来たが、お互い手を離そうとはしない。
少女が遠慮がちに言う。

「…一緒に寝ていい？」

大きなベッドに小さな子供ふたりが手を繋ぎながら眠る。

それは静かな静かな夜。

8．ふたつ

一体この夢はいつまで続くのだろう？

朝起きてもまだ１０年後の世界だった。

もしかして自分はもう死んでいるのだろうか。
気がつかない内に、組織に見つかり殺されてしまったのだろうか？
そして都合のいい夢の中にいつまでもいるのだろうか。

学校は休むことにした。頭のせいにした。
コナンは心配して自分も休むと言ったが、なんとか学校へ行かせた。
玄関まで送ると、去り際にキスをされる。

（・・・全くこの夢は心臓に悪すぎるわね）

早くこの世界から脱出する対策を考えなければいけない。

でもその前に２つ確かめたい事がある。

まずは組織のこと。

そして、やっぱり蘭のこと。
結婚して子供がいると聞いたけれど、この目で見てみたい。
納得出来ないから。
彼女は本当に幸せなんだろうか。

組織のことも、蘭のことも、何があったのかコナンに聞けば簡単に
答えてくれるかもしれない。

でも聞かなかった。
この世界の彼に不信に思われたくなかったのだ。
今更そんなことを聞く哀を疑問に持つだろう。

なんとなく優しすぎる彼を傷つけるような気がして。
彼が愛してる灰原哀を壊してはいけないような気がして。

夢か幻のはずなのにおかしいけれど。
まだ、知られたくない。

胸が少しチリチリと痛い。

なんだろう？このモヤモヤは？

ため息をついて、食器を片付けにリビングに戻る。
そして家にあるパソコンでまず調べて見ることにした。

8．ふたつ（後書き）

話が進まなくてすみません。

9．博士

チャイムが鳴った。
情報収集に集中していて時間はお昼を過ぎていた。
組織の情報らしきものはあまり見つからなかった。
公にされることは何もなかったのだろう。
大衆雑誌の記事や噂話でいくつかの気になるものがあった程度だ。

「博士…？」

訪問者は博士だった。１０年経っているのにほとんど変わらない。
相変わらずふっくらしている。

「怪我は大丈夫かね？コナンくんから電話があっての。様子を見てくれと…」

変わらない喋り方。無償に懐かしくて、抱きついていた。

「哀くん？」

博士は7年前に結婚していた。相手はもちろん初恋のフサエさん。
第二の人生を穏やかに暮らしているらしい。

その時期に、工藤くんと私は工藤邸に住みはじめたみたいだ。

「ごちそうさまでした」

お昼を一緒にと誘われ、博士の家にいる。
私が住んでいた頃と違い、お洒落で家庭的なフサエさん色の生活空

間に変わっていた。
「とっても美味しかったわ。健康的なメニューだったし。後でフサエさんによく言っておいてね」
「彼女も一緒に食べられたら良かったんじゃが」
「引退したのに忙しいのね。博士あんまり一緒にいられないんじゃない？」
「コレクションが控えてる今が１番忙しいみたいじゃよ」
「…ねえ、博士」
一段落した今さりげなく。
「組織ってどうなったのかしら？」
「組織？…哀くん何を」
「まだ、存在しているのかしら？」
「１０年前にお前さん達二人とＦＢＩが壊滅させた時、ほとんどが逮捕されたり、死んだりしたが…」
１０年前に、組織を壊滅に追い込む何かがあったのね。
「そんな昔のこと今更どうしたんじゃ？…まさか組織の残党が？」
「ううん。違うの！ただなんとなく思っただけ」

「…哀くん。もう大丈夫じゃよ。奴らはおらん。忘れたほうがいい」
博士の優しい目。
心配させてしまったと後悔する。
「博士変な事言ってごめんなさい。一人でいたら、考えてしまったの。工藤くんには言わないで。彼、心配するから」
「解っておる」
「…ありがとう。博士」
「しかし…もう10年も経ってしまったのか…」
博士が思い出すように視線が遠くを見つめる。
「ワシを除けものにしおって、二人で組織と戦いに行ってしまった。連絡来た時はお前さんたちは重傷」
「・・・・・・・」
「あの時は恨んだよ。どうして何も言ってくれんかった。水臭いじゃないか。そして、二人とも死んでしまうんじゃないか、と心配して生きた心地もしなかった」
「…ごめんなさい」
博士の目尻にうっすら涙が見えた。
深く考えなくても解る。

私と工藤くんは誰も失いたくなかったから、博士にも内緒にしていたんだろう。
それくらい命懸けの戦いだったんだ。

「いや…、忘れろと言ってるワシが過去を思い出して責めてしまった…すまない」

「博士…」

私達は重傷を負うくらいの体験をした。
そういえば昨日お風呂へ入った時、私の身体には見覚えのない傷痕と弾痕があった。
きっとその時の傷ね。
小学生二人が重傷になって、騒ぎにはならなかったのかしら？
…まだ、解らない事だらけだ。

博士の家を出て、家には戻らなかった。
１０年後の街をゆっくり歩いてみようと思う。
夢なのか、他の世界に迷いこんだのか。
どちらにしてもこの非現実的なことが、今もまだ続いている。
何か元に戻る手掛かりが、見つかればいいのだけれど…。

背丈が伸びて見る街は新鮮だった。
違う街に来たような、馴染みのあるような。

「探偵事務所…」

見た目には変わってはいない。
昨日の話だと結婚した蘭さんはここにはいないだろう。

下の喫茶店も少しくたびれた感じはするが、変わりなさそうだ。

「こんにちは！」

小さい子供を連れた女性に挨拶される。

「こんにちは」

小さく会釈して通り過ぎようとした。

「…哀ちゃん？」

子供を連れた女性に呼び止められた。それは、気になっていた人。

…毛利蘭さんだった。

9．博士（後書き）

息詰まってます。

１０．幸福の時

「わー。綺麗」

「ありがとう。みんな」

真っ白いウェディングドレスに包まれた女性が華やかに笑う。
その輝く表情は世界一幸せそうに見える。

親戚や友達に囲まれ話しながら、少し遠くに離れた中学生くらいの少年少女の側に歩いてきた。

「結婚おめでとう。＊＊姉ちゃん凄い綺麗だよ」

「おめでとうございます」

「ありがとう。ふたりとも来てくれて嬉しいわ」

ふと少年を見つめて女性の表情が陰る。

「…どうしたの？」

「＊＊＊くん。なんだかますますアイツに似て来ちゃったわね。親戚だから似るのは仕方ないけど」

「・・・・・」

「こんな時にも顔出さないなんて、アイツは一体何をしてるんだか」

「＊＊姉ちゃん…。あの…」

「今度会ったらとっちめてやらなきゃ。…でも、アイツが元気で幸せならそれでいいんだけど」

母親に呼ばれ、花嫁は少年少女の元を離れる。

「…いいの？」

黙り続けていた少女が聞く。

「ああ。＊＊が元気で幸せならそれでいい」

少女が俯くと、少年は少女の手を握る。

少女も少年の手を握りかえした。

そして美しい花嫁を優しく見送った。

１０．幸福の時（後書き）

意味が解らない回が時々挟まってますが、後に解るようになってます。
もう、解る人は解ると思いますが。

11．気になっていた女性

私に声をかけた女性は毛利蘭さんだった

「蘭…さん？」

「やっぱり！うわー、しばらく見ないうちにスッゴク綺麗になっちゃって！」

綺麗になったのは蘭さんのほうだ。
腰まであった長い髪の毛をばっさり切って、ショートに。
あの頃していなかった化粧がキリリと顔を引き締め、彼女の弁護士の母親に似てきている。
色のついたルージュが、大人の色気を匂いたつように出していた。

「こりゃーコナンくんも大変ね。あ！コナンくん元気？」

「…はい」

太陽のように笑う笑顔は、更にその眩しさを増している。
全く顔出しなさいと言ってるのに音沙汰なくて…と彼女の父親が昨日言ってたような事を話す蘭さん。
ふと気づくとぽかんと口を開けた子供が私を見上げていた。
目が合うと蘭さんの後ろに隠れる。

「あれ？初めてだっけ？娘の椿よ。二歳なの」

蘭さんは手を引き子供を前に出した。
しゃがみこんで、目線を同じ高さにする。

「こんにちは」

よく見ると蘭さんに似ている。
母親譲りの黒髪と丸い大きな目。
こんにちはと照れながら小さな声で返してくれた。

「お茶、しない？」

喫茶店ポアロで蘭さんと向き合う。
新出蘭となり、母親として慈愛に満ち足りた優しい顔で娘を見る彼女は改めて綺麗だ。

「幸せ…ですか？」

飲み物が運ばれ、哀は聞いてみた。

「ええ。とっても」

幸せに笑う彼女は輝いている。

「でもどうして？」

「あの…いえ…」

こんな幸せそうな彼女に、私は何を聞こうとしてるのか。

「工ど…」

蘭さんの目が開く。

「コナンくん！」

「え？」

振り向くと工藤くんが制服のまま立っていた。
ホッとしたような、怒っているような顔をしている。

「家にいないから心配したじゃないか。なんで出歩いてるんだよ」

「え？どういうこと？」

「ああ、蘭姉ちゃんごめん。実は」

工藤くんが蘭さんのほうを向いた隙に立ち上がる。

「久々に会ったんだからつもり話もあるでしょ？
二人で話ししてたらどう？私帰るから。蘭さんご馳走様でした！」

一気にまくしたてて店を出る。
この世界では姉弟のようになってしまった毛利蘭さんと工藤くん。
二人は本当にそれでいいのか。
元の年齢と同じくらいになった工藤くんの隣には蘭さんが1番似合う。
胸がズキリと痛み、頭の後ろがじんわりと痛む。

「あんなに好きあっていたのにどうして」

夢なのかなんなのか解らないこの世界が、私の心の奥底の願望だったとしたら。

「やっぱり私は欲深くて酷い人間ね」

走りつづけて家の前。追いかけて来た工藤くんが、私を抱きしめる。

「お前本当にどうしちゃったんだよ」

埋められた胸から顔を上げると工藤くんの心配だという顔に、やはり胸が切なく高まる。

昨日から、工藤くんが見せる灰原哀への愛にときめいてしまう。

…少し嬉しくて…。

その自分の狡さに馬鹿さに吐き気がする。

「工藤くん…」

「え？」

涙が出そうになって、下を向いて顔を隠した。

顎を持たれ顔をあげされられると、唇を塞がれる。

優しく熱いキスはとても甘く、頭を麻痺させる。

切なさが極まって涙が出る。

再び抱きしめられた。

「お前が何処か遠くに行ってしまうようで、不安だ」

工藤くんは力を込めた腕を中々離してくれない。

１１．気になっていた女性（後書き）

少し間が開いてしまいました。展開をどうしていこうか悩んでおります。ラストは最初から決まってるのですが…。
蘭の子供の名前は花の名前繋がりで適当ですので、それぞれ好きな名前を当て嵌めて変えて読んでください。

投稿し間違えて書いたものを消してしまい、気力がゼロになりかけました（笑）書き直しておかしくなってるかもしれない。

12．覚醒

少女の意識が浮上する。
目を開けると疲れて衰弱し泣きそうな少年の顔が見えた。
少女の名前を叫ぶ。
痛々しく包帯を巻いた少年がホッとしたのか、涙を流した。
全身包帯まみれで色んな管に繋がれている少女は、ぼんやりとした意識の中で少年を見つめる。

「私達…助かったの…？」

「ああ」

病院の機器以外の音のしない静かな病室にふたり。

「良かった…良かった！」

寝ている少女を抱きしめた少年は、心の底から安心したように意識を無くした。
一瞬危険な状態かと思われたが、規則的な寝息が安心させる。

「…私、生きてるの？」

ぽつりと少女はまた、深く目を閉じた。

１３．不安と愛してる（前書き）

よく解らなくてすみません

13．不安と愛してる

彼を不安にしている。
それは私の胸に酷く痛みを伴わせた。
この世界の彼の愛する灰原哀は私ではない。
でも、そんなことを言ったら彼を更に傷付けてしまうだろう。
やっぱり彼を傷付けたくない。
抱きしめ返して愛してると、つい言ってしまった。

キスを繰り返し愛を囁き合う。
…この世界から早く脱出したい。
そうしないと、ズブズブと嵌まってしまいそうだ。
どうしても自分を好きだと言ってくれる彼に酔ってしまう。
現実では有り得ないこと。
だけどこの世界のコナンは哀を愛してると言ってくれる。
ずっと好きだった彼との甘い世界に飲み込まれてしまう前に脱出しないと、現実には一生戻れない気がする。

風呂場から出るとコナンは電話をしていた。

「うん。解った。じゃあお休みなさい」

電話を切って私の頭のタオルで髪の毛を拭いてくれる。

「蘭がまた遊びに来てねってさ」

「蘭さんに悪いことしたわね…」

二人を見た時感情が高ぶった。

1番聞きたい事を遮られたからではなく、ただの嫉妬。
お似合いだったはずの二人を割いてしまった罪悪感。
罪悪感？

「蘭は気にしてないって。今度一緒に蘭の家に遊びに行こうぜ」

「ええ…」

「じゃあ、俺も風呂入ってくるか」

そう言ってキスをしてくる。
何度も交わした愛の言葉で、彼は不安から解放されたのだろうか？
この世界での私は私じゃないけれど、あれは私の本音。
工藤くんが好き。愛してる。
でも彼は私の好きな工藤くんじゃないのだ。

お風呂から上がってきたら、どうやって断ろうか。
拒んだらまた不安にさせてしまう…。
でも…。

コナンがお風呂から上がると、哀はリビングで寝ていた。
色々疲れているのと、考えすぎて意識が遠くなってしまったのだ。
コナンは優しく笑い、哀を抱き上げて2階の部屋まで連れていく。
そしてベッドに入り哀にキスをして一緒に眠った。

１３．不安と愛してる（後書き）

迷いながら書いていて中々進みません。

１４．世界で１番（前書き）

エロ注意

１４．世界で１番

「本当にいいのか？」

「ええ」

何度目かの確認を少年がしたので、少女は笑ってしまう。
ここまでしておいて、少年はまだ迷っているのか。
まあ、仕方ない。
初めてなんだから。
少女は自分からキスをする。
深く吸って少年の舌を絡ませる。
服のない肌と肌がくっついて熱を生む。
そこまで何度も高ぶらせた少女の身体は充分潤って準備が出来ていた。
少年の方も我慢できずに熱を持って熱く固くなっている。
ゆっくりと少年が少女の中に入っていく。

「……っ！」

「大丈夫か？」

痛みに顔を歪ませ涙を流す少女に少年の動きが止まる。
少年も狭い少女の中で圧迫され一杯一杯なのだが。

「…大丈夫…よ。それより嬉しいの。あなたとこうなれて」

泣きながら笑顔の少女が愛おしくなって少年はキスをする。
そして１番奥まで自分を埋めた。

「愛してる」

「私も愛してる」

最初はゆっくり動くつもりだったが、身体がそう上手くはさせなかった。
本能のまま早く動いて、少女の体に無理をさせてしまう。
しかし、お互い幸せの絶頂にいた。
初めて身体を合わせることに夢中だった。
身も心も溶けてひとつになりたかった。

「愛してる＊＊！！」

大きく震えて少年は想いを遂げた。
少女もそれに合わせて幸せに浸った。

波が去っても少年が少女から離れないままだった。
少女も回した腕を解かなかった。

「＊＊＊＊くん。ありがとう」

「＊＊？」

「あなたが私を選んでくれて。愛してくれて。私凄い幸せ」

少女がまた涙を流した。
普段余り多くを語らない彼女が、自分から話そうとしている。

「好きよ。世界で1番愛してる」

二度と聞けない貴重な言葉かもしれない。
少年は笑ってキスをする。
再び感情が高ぶり始めた。

「俺も幸せだよ。オメーがずっと側にいてくれて、愛してくれてる。
本当に嬉しい」

見つめあってまたキス。

「オメーただ一人だ。世界で1番愛してるぜ」

沈黙が流れる。
臭い台詞にお互い照れて顔を赤くした。
でも恋人同士ならそんな臭い台詞も甘い時間の材料でになる。
強く抱き合いお互いの熱を確かめあった。

１４．世界で１番（後書き）

もうどーにでもなーれ！

15．病室

「＊＊＊＊オメーが好きだ」

静かな白い部屋で少年は言う。

大分怪我が治ってきた少女は驚愕した。

「＊＊＊くん何冗談言ってるのよ！」

「冗談じゃねえ。本気だよ」

何となくおかしいとは思ってはいた。

少女が目覚めてからの彼は毎日少女のところに来て常に世話を焼いてくれる。

用もないのに黙って一日中側にいる。

特別病棟の認められた看護師さん達は可愛い小学生の少年少女が仲良くしているのを、微笑ましく見ているし。

時にはからかったりもする。

少年の怪我は既に治っていた。

「＊＊さんはどうするつもり？」

少女は努めて冷静に聞いた。

それが１番重要だからだ。

「＊＊とはもう話した。好きな人が出来た。もう待たなくていいからって」

「！！…あなた正気？本当にそれでいいの？」

「いいんだ」

さっぱりとした少年に、少女は呆れて物が言えない。

「俺は＊＊＊＊が好きだ。オメーは？」

少女は戸惑った。
先に好きになったのは自分のほうだ。
でもそれは完璧な片思いで、こんな風になるとは思いもしなかったのだ。
少女が意識不明になっている間に、少年に何の変化があったのだろう。
怪我をして死にかけた自分に同情して勘違いをしているのではないか？

「言っとくけど、同情じゃないぜ。一次の気の迷いでもない。
本気でお前が好きだ」

心を読んだように少年は先手を打った。
心が読めるなら少女の気持ちも解るだろうに。

「まあ、返事はすぐじゃなくていいよ。考える時間も必要だしな」

そう言うと立ち上がり部屋から出て行こうとする。
開いたドアの幅を間違えて軽く激突する。
余裕そうに見えても、彼なりに告白することに緊張していたのだ。
少女の胸は張り裂けそうなくらいドキドキしていた。

今すぐ少年に「私もあなたが好き」と叫びたい。
でも、そんな事が許されるのだろうか？
そんな資格が自分にはあるのだろうか？
待たなくていいと言われたあの人はどんな気持ちでいるのだろう。

「お姉ちゃん、私どうしたらいい？」

亡き姉が生きていたらなんて言ってくれただろう。
告白されて嬉しい。
でも…。
ベッドに少女はうずくまる。
少女は白い静かな部屋でいつまでも考えこんでいた。

15．病室（後書き）

3話投稿しても実質話は1話ぶんしか進んでいません…。
さくさくした展開が思いつかない…。

１６．翌日（前書き）

更新が遅くてすみません。

16．翌日

目が醒めると工藤くんが私を抱くように寝ていた。
とても驚いたが、ぐっすり眠っている工藤くんを間近で監察してしまう。
大きくなった工藤くんをじっくり見るのは組織で見た資料以来で、実物は初めてかもしれない。
口を開けて無防備に寝ている姿は、推理でかっこよく決めている工藤くんとは思えないくらい可愛い。
江戸川くんの時は眼鏡で隠れていた睫毛も、案外長いのだと気づいた。
額にかかる黒髪もさらりとして、その顔立ちもどこか中性的に整っている。
サッカーも上手くて頭もキレて…少女漫画のヒーローのようだ。
モテないはずがない。
そういえば江戸川コナンでも結構モテていた。
現実の彼に会いたい。
ツン…と胸が苦しくなった。

（私はまだ現実には戻れない）

二人分の温もりのベッドの中は暖かくて、再び眠りに引き込まれそうになった。
工藤くんが身じろぎをしてハッとする。
ゆっくりと工藤くんが目を開ける。
目が合うと優しく微笑んで私にキスをした。

「おはよう」

「…おはよう」

また、不意打ちだ。

その日は学校へ行くことにした。
しかし私には馴染みのない学校、クラス、クラスメイトに悩まされることになる。

「灰原さんおはよ」

ポニーテールにした元気の良さそうな女の子が声をかけて来た。

「おはよう」

「いいなー。私もイケメン彼氏と登校したいー」

鈴木さんみたいなこの人は誰だろう？

「哀、じゃあまた後で」

どうやら工藤くんとはクラスが違うらしい。
これは困った。
この元気のいいポニーテールの人と同じクラスらしいが…。
教室に入っても席が解らない。

「灰原さんおはようございます」

円谷くんだった。知った顔があるのは心強いかもしれない。

「おはよう」

「怪我は大丈夫ですか？昨日休みだったので心配しました」

「ええ。大丈夫よ。心配してくれてありがとう」

「良かったです。…？灰原さん？」

なんて言おうか。
いきなり私の席何処？と聞いたら疑われるに違いない。

「ねー。灰原さん解らない所があるの教えてー。円谷くんでもいいけどー」
「ああ大野さん。また灰原さんの席に座って！」

さっきのポニーテールの子が円谷くんとやりとりをした後席を移動して、勉強を教わり始めた。

（あそこが私の席ね）

助かった。
彼女が私の席に座るのは、珍しくないのだろう。
そして彼女が円谷くんを好きなのも、どうでもいいのだが解ってしまった。
…しかし疲れる。
こんな事をしている時間が無駄なような気がするが、またサボったりなんかしたら工藤くんを心配させてしまう。

暇つぶしに机の中身を確認した。
クラスの人達は円谷くん…さっきの大野さん（名前と顔だけ）以外は解らないので、余り関わらないようにしよう。

朝。鞄のノートも見たけれど、自分の字なのに書いた覚えがないという不思議な気持ちにさせられた。
机の中のノートも同じだった。

「？」

美術の教科書に違和感があった。
小さな異物感を頼りに指をスライドさせる。
やはり何かあるようだ。ページをめくる。

「鍵？」

セロハンテープで止めてあったそれは何処かのロッカーの鍵みたいだ。
ドキリとした。
この世界の灰原哀が隠したもの。
工藤邸には置いておけない何か。
美術の教科書なんてほとんど開かないから、ここに隠したのだろう。
この世界から抜けだせる何かの糸口にきっとなる。
希望が見えた気がした。
工藤くん…この世界の江戸川くんの顔が浮かんで胸が痛む。
ふと気づくと、円谷くんがこちらを見ていた。
さりげなく目を反らし、鍵をポケットに隠して教科書を閉じた。

１６．翌日（後書き）

やっと話が進み始めたかもしれません。更新が遅くてすみません。まだ謎ばかりで、読むほうはどんな風に感じているのかなぁと思います。

17．道と闇

「ごめんなさい…」

少女はうわごとのように小さく呟いて涙を流した。
自分の無力さに。
自分の弱さに。
自分の…罪に。

「いいんだよ。必要のないものだ」

人形のようにパソコンの前で脱力している少女を、少年は抱きしめた。
もう何度も言っているのに、少女は泣いて謝るばかりだ。
少年は既に覚悟し揺るがない信念をもって、道を決めていた。
もう選択したのだ。
そしてもう道を歩き始めている。

「オメーと生きていくって決めたんだよ」

「・・・・・」

「なのに。一緒に歩くはずのオメーがそれじゃ、俺どうしたらいいんだよ」

「・・・・・」

「もう、過去は捨てて前だけ見ていこうぜ。全部終わったんだからさ」

「・・・・・っ」

腕の中の少女が小さく震えた。
少女にはまだ完全に届いてないと少年は解っている。
少女は闇を抜けだしても、それを振り向いて見続けてしまうのだ。
まだ闇に追われている。
自分からその闇に捕われようとしている。
少女の闇は深い。
これからも、こうやって手を繋いでいても、立ち止まり後ろを振り向くのだろう。
でも、手さえ離さなければきっと。

「なあ。だからもう泣くな」

「…＊＊＊くん」

少女はまた大きな涙を流した。
少年は少女が口にする過去を聞き流した。

17．道と闇（後書き）

色々足踏みするような展開ばかりです。
パズルのようなイライラ感。

18．決別

「…悪ィ。もう待たなくてもいい。」

少年は自分の声を機械で変えて、元の自分の声で話した。
電話の相手の幼なじみは絶句した後、訳を聞いてくる。

「俺、もう帰れそうもねーから。＊＊が待つ必要がないんだ」

納得出来ない幼なじみが更に声を荒げ、約束をやぶろうとしている少年を責めてくる。
既に涙声だ。

「あのな、聞いてくれ。本当は直接会って言いたかったんだけど…」

少年は言葉を切った。
幼なじみはしゃっくりをあげながら言葉を待つ。

「俺ずっと＊＊が好きだったんだ。子供の頃から。」

『＊＊＊＊…！私も…』

「待ってくれ！まだ話しを聞いてほしい」

一呼吸置いて、少年は語り出す。

「＊＊が好きだった。ずっと。でも今は、他にもっと好きな奴が出来た」

『！！』

息を飲む音がした。
幼なじみが大きなショックを受けたことは電話越しでも解る。

「俺、今抱えてる事件でそいつと出会って守るって約束したんだ。
そしたら、そいつがいつも俺を守ってたんだよ。
傍にいて気づかなかった」

『・・・・』

「自分の無力さと愚かさで悔やんでいた中で解ったんだ。彼女が凄く愛おしい。１番大事で失いたくないと。…ゴメンな＊＊」

「…＊＊＊＊…＊＊＊＊！酷いよ！！ずっと待ってろ必ず私の所に帰るからって言ってたのはそっちじゃない！！」

幼なじみの激情が手に取るように解る。
太陽のように明るくて、天使のように優しい彼女を傷つけている。

「狡いよ！好きな人が出来たから待たなくていいですって？＊＊＊＊勝手すぎるよ！！」

「ゴメン…」

幼なじみは泣いている。
自分はなんて酷いやつなんだろう。
でも少年は決着をつけなくてはなからなかった。
気持ちが違う方へ向いている、どういう方法でも彼女を傷付けるのだ。

元の身体で顔を会わせて話すことも出来ない。
はっきり言ったほうが諦めが早いかもしれない。
期待させるだけ酷だ。

「本当にすまない。＊＊今までありがとう。お前が元気で幸せにいてくれることを願っている。じゃあな」

「＊＊＊＊？嫌よ＊＊＊＊！！＊＊…」

少年の本名を呼び続ける幼なじみを、振り切るように電話を切った。

幼なじみは泣き虫だけど、心に柳のような強さも持っている。
その望みにかけるしかない。
そして彼女には、彼女を支える強い両親と心強い友人達がいる。
少年がいなくともきっと立直ってくれるはずだ。
少年が好きだった人だから。

少年はしばらく陽の光溢れる遠い過去を思って、さよならをした。

19．新しい春の訪れ

「どう？」

ドアを開けて少女が着たセーラー服姿を見て、少年は見とれた。
小学生から中学生へ。
一つ学年が上がるだけなのに、大人っぽく見えるは制服の力だ。

「凄く似合ってる。可愛いよ」

「…あなたも」

顔を赤くし少女は言った。
真新しい制服は眩しく爽やかにお互いを引き立てた。

「まあ、二度目だしな」

少年は照れ隠しに学ランのボタンを開け閉めした。
毎日一緒にいるのに新鮮な感じがしてこそばゆい。
少女が少年に近づいて、唇を合わせた。

家の前で写真を撮ると言って、写真を撮る瞬間泣き出した隣人の年寄り。
淡いピンクの桜が祝福するように街を賑やかにしている。

「ほら、泣かないの」

「だって嬉しくてのおー…」

「ああ、また泣く」

「＊＊＊ー。俺達遅刻しちまうぞー」

「あなた達おめでとう」

隣人の年寄りの奥さんも、彼女のデザインしたプレゼントとともに祝福してくれる。

笑顔に包まれ写真に刻まれる思い出がひとつ増えた。

２０．鍵

鍵。

これには番号が書かれている。
学校のものではない。
多分…駅の鍵だ。
０４８
鍵に数字の書かれた赤いタグがぶら下がっている。
駅にあるコインロッカーの鍵だと思う。
何処の駅のものか解らないので、地道に探すしかない。

「今月の依頼ですが２件。そのうち一つはいなくなったペットの猫を探すと、もう一つは…」

お昼休み。
探偵倶楽部で皆で集まることになり、お昼を食べながらミーティング。
…と言っても対したことはなさそうだ。
どうやらこの探偵倶楽部は、部員５人だけのお気楽同好会みたいなもので、皆それぞれ他の部活や委員会など兼任しているらしい。
お気楽と言ったら三人から怒られそうだが。
部長は小嶋くん。副部長は吉田さん。
でも実質、１番しっかりしている円谷くんが部長のようなものだ。
彼は生徒会もしていて大変忙しいのに、探偵倶楽部に豆に来ているらしい。

（だからモテるのね…）

此処へ来る時。
円谷くんと部室に向かおうとすると、大野さんがこちらを見ていた。

「哀！」

教室を出ようかという所で工藤くんが迎えに来た。
そのまま歩き出すが、工藤くんは私が教室を一瞬見ていたのを見逃さなかった。

「どうした？」

工藤くんの眼鏡奥の丸い目を見ながら、大野さんの目を思い出す。
あの目をよく知っている。
自分がいつもしていたからよく解る。
相手に届かない視線。
片想い。
いつも背中ばかりみるの…。

「相手が鈍感な程辛いのよね」

「は？」

薄い目で見たら工藤くんがどういう事だと憤慨した。

「……灰原さん。なんで次は僕を睨むんです？なんでため息なんてつくんです？」

「…以上です」

円谷くんの報告が終わると、小嶋くんが依頼調査の日程を決めていく。

時々部員それぞれの用事を合わせ、多少変更したものの順調に進んだ。

吉田さんが聞いてくる。

「哀は予定大丈夫？問題ない？」

「ええ」

その時工藤くんの携帯が鳴る。

「はい。解りました。…すぐ行きます」

どうやら事件が起きて、応援要請が来たみたいだ。

やはり高校のクラブ活動ではなく、本格的な探偵が彼にはお似合いみたいだ。

「哀」

工藤くんが手招きをして私を外に連れ出す。

「遅くなるかもしんねーけど…大丈夫か？」

心配そうに私を見ている。

私を一人にすることにまだ不安なのだろう。

「大丈夫よ。事件頑張ってね」

…少し考えて工藤くんの頬にキスをした。
このくらいは恥ずかしいけど出来た。

「ご飯作って待ってるから」

「…うん」

工藤くんは顔を少し赤くして、笑顔で事件現場へ向かっていった。

「…さて、と」

振っていた手を顎に持っていく。
私も早退すべく探偵倶楽部の部室に戻り、すぐに教室へ向かった。

（ごめんね…工藤くん）

なんとなく罪悪感が生まれて心で謝ってしまう。
でもこれはロッカーを探すチャンスだった。
学校と工藤くんと住む家。
ほとんどが拘束されているようなものだ。
だから工藤くんが事件に関わって、側にいない今がチャンスだ。
皆には自分も事件について行くと言ったら納得してくれた。
もし、嘘がバレたらその時はその時考えるとしよう。
掌にある鍵を握りしめた。

「米花駅…」

まずはここから。
コインロッカーを探す。
自分の記憶していた時と場所が違っていて手間取る。
タグの色がまず違う。
すぐに別の場所へ行くが同じだった。

駅員に聞くとこの駅には二カ所しかない。

「やっぱりすぐには見つからないか…」

小さくため息をついて駅の路線図を見る。
一応駅員に何処のコインロッカーの鍵か聞いたけれど、良い返事ではなかった。
多分そんなに遠い駅ではないと思う。
鍵を剥がした時、セロテープの粘着が強かった。
つまり結構長い間あの教科書に貼っていたことになる。
鍵を使わずに持ち続けると言うことは、定期的にお金をロッカーに入れに行かなくてはいけない。
お金を入れに行かなかったと言う可能性もあるが。
ある程度時間が経つと、回収されてしまうのではなかっただろうか。
工藤くんに怪しまれないように、余り遠くない駅にするはずだ。
隣の緑台駅か下田馬場駅どちらだろう…もしかしたら大きな駅まで足を伸ばして沢袋駅か新宿駅かもしれない。
東京駅まで行けるか？
いや、東都線だけで考えても無駄かもしれない。

候補が多くて途方に暮れた。
地道に探すと思いながらも少し甘く考えていたのかもしれない。

「はあ…」

とぼとぼと家に帰る私がいた。
あの後いくつかの駅に行ったが成果なしだった。
簡単には見つからない。
夕御飯を作る約束をしたし、工藤くんが帰って来ているかもしれないので切り上げてきた。
門をくぐろうとした時声をかけられた。

「あーいちゃん！久しぶり」

お昼に別れた顔があった。

「く…」

…いや、違う。
制服も着ていないし、それよりだいぶ年上に見えた。
多分、２０代半ばから後半。
ちょうど薬を飲まなければ当然なっている年齢くらい。
漂う雰囲気も工藤くんとは違う気がした。
でも顔はよく似ている。
第一工藤くんだったら哀ちゃんなんて呼ばない。
誰…？

「会う度に綺麗になってくね。さらって行きたくなっちゃうなあ…って洒落にならないか」

「あなた…」

私のことを知っているあなたは。

「…誰？」

２０．鍵（後書き）

展開に悩んでついに出してしまった…。
もうお分かりだと思いますが、あの人です。

21．崩壊（前書き）

ググダダ書いていたら、だいぶ間が空いてしまいました…。
それでもアクセスして戴いて下さった方々に申し訳ありませんと謝りつつ、感謝致します。
では続きです。二話あります。どうぞご覧下さい。

21．崩壊

鮮血が飛び散る。
少女は少年を庇い床に倒れた。
少年が狂ったように少女の名前を呼ぶ。

少女を撃った男はその鋭い目を向けて二人を見て、今度こそ少年の息を止めようと拳銃を握る。
少年の頭部に向くその目が大きく開いた。
油断をしたのだ。
自分に銃口が向けられていたとは気づかなかった。
先程裏切りものだと気づいて殺したと思っていたスパイ。
その男に撃たれた。
手から拳銃が落ち、拳銃をもった数人に囲まれる。

意識が遠くなる視界に赤みがかった茶髪を入れて、ニヤリと笑う。
ボタンを押すとすぐに近くで爆発音がした。
ガラガラと瓦礫が落ちてくる。
慌てて避難するようにと誰ともなく指示され、逃げだす。
少年は少女を抱えて部屋から出る。
息絶え絶えの少女が少年に言う。

「私はいいから…あなただけでも逃げなさい」

「バーロ！オメーを置いていけるかよ」

少年は激怒した。
近くでまた爆発が起き、先程までいた部屋が崩れる。
あの男は撃たれて動けずに部屋の中にいたはずだ。おそらく助から

ない。
少年は少女を担いで歩き出す。
するとコンクリートの塊が落ちてきて、二人に降り注ぐ。
少年は少女を守るように庇う。

それが止んで少女が叫び声をあげた。少年の名前を呼ぶが返事がない。
意識のない少年が少女の肩の上で目を閉じている。

「大丈夫か？」

一人の男が現れた。
小さな少女と少年を見つけて瓦礫を退かす。
大人の外国人でＦＢＩの人。

いやその雰囲気。
少女を見た瞬間から、おそらく仮面を外し素を出した。
未成年である少年の雰囲気。

「あなたは…」

「＊＊ちゃん！大丈夫？」

白い彼。
心配そうに覗き込む男に安心して、少し意識が遠くなった。
男は血まみれの少女に青ざめる。

「そんな…撃たれているのか！＊＊ちゃん！！」

「私は…大丈夫。彼を…＊＊＊くんをお願…い　」

少年は意識を失っているが命の心配はないだろう。
見た目外国人の男は白い布で、少女の撃たれた部分を覆った。
気休めだが少しでも血が止まればいい。

男は幼い二人を抱えて走り出した。
崩れていく建物内は、更に危険となる。
なるべく早くと元々身軽な身体を使って走る。

命からがらなんとか外へ出た。
自分で開けた穴が近くにあったのが救いだった。
待機していた医療班に少年少女を引き渡す。
もちろん声は変えて。

医療班が少年と少女を車のベットに横たわらせ治療を始める。
小さな少女が男の袖を引いた。

「…ありがとう」

少女のその消えそうな笑顔に、一瞬涙が出そうになる。
小さな手を握り祈るように彼女の耳元へ顔を近づける。

「死なないで…」

「…」

息が絶え絶えの少女は横たわる少年の方角を目だけ動かせ見た。
既に頭はうごけない。

医療班が男に離れるように言う。

「彼は大丈夫だよ」

気遣うように言うと少女はホッとしたような笑顔になる。
男は宝物のように優しい眼差しで見つめ笑い返し頭を撫でた。
少女は意識を失った。

慌ただしく医療班は少女に取り掛かる。
秘密の病院へ車は去っていく。

あの男はいつの間にか消えていた。

22．白い翼

「誰？」

工藤くんにそっくりなその人は、一瞬全ての動きを止めた。
気を取り直して、硬直した笑みで口を開けた。

「またまたぁー。ビックリさせようとしてー…冗談キツイなあ。久々に会ってその台詞」

「・・・・・・」

「冗談…だよね？」

「・・・・・・」

表情も変わらず無言の私に、その人の笑みは完全に消えた。
信じられないと言う顔で目を動かし私を凝視する。

「どうしたんだ？一体何があった？」

「…だからあなたは…」

もう一度誰なのか質問をしようとした。
でも、その悲しい瞳に言葉が出て来なくなってしまった。
置いていかれた子供のような不安と悲しみと疑問の瞳。
今にも泣きそうだ。
年上なのに何故か小さな子供に見えた。

「…俺のこと解らない？」
私が小さく頷くと、その瞳は更に深く沈んだ。
（そんなにショックだったの…？）
誰？なんて言わなきゃ良かったと後悔した。
適当に話を合わせてれば良かった。
どうして軽はずみに口にしてしまったのか。
この世界の灰原哀の大事な知り合いなのかもしれないのに。
「あなた、名前は？」
彼はまた傷ついた顔をした。
また傷つけてしまった。
「黒羽快斗」
「失礼ですけど歳は？」
「27だよ」
27…。やはり私達の元の年齢と同じくらいの年頃。
工藤くんの親戚？同級生？
彼、黒羽さんの瞳は私を縋るように見ている。
いい大人の男が女子高校生に泣かされている。通行人にはそう見えるかもしれない。
悲しいと身体全体から見てとれる。
縋る瞳が私を見つめる。
名前を聞いたら思い出すかもしれないという期待の瞳で。

でもその期待には答えられそうもない。

「…ごめんなさい。私あなたが解らないの」

「・・・・・・・・・」

大きく愕然とした顔をして俯いた。
しばらく黒羽さんは俯いたまま何も言わない。
涙を流しているかと思ったら、考えこんでいるようだ。
その顔も工藤くんにそっくり…。

「…君は哀ちゃんだよね？それとも…志保ちゃん？」

「！！」

この人は何処まで私を知っているの？
一体誰なのか？
ますます疑惑が生まれる。
でも不思議と危険な感じがせず、警戒心が生まれない。
だからって気を許すつもりはないけれど。

「…なんのこと？…私は灰原哀よ」

「…そう。会わない内に何があったのかは解らない。でも俺は君の味方だよ」

「味方？」

「うん。何があろうともどんな事が起きても味方だ」

私の目を見て真っ直ぐ言葉を言った。
胸が苦しくなるのは、工藤くんに似ているからかそれとも…。
「君の為だったら何でもするよ。今でもそうだった。これからもそうだよ。…君が俺を忘れたとしても…」
一瞬、また泣きそうな顔をしたが、真っ直ぐ私を見ている。
「…あなたと私の関係は…何？」
「……同志」
しばらく間があって黒羽さんは答えた。
「同志？」
「まあ、深くは考えなくていいよ。友達みたいものだ。そう俺と君はともだち」
おどけるような表情になる。
表情が豊かな人だ。くるくる変わる。
普通なら信用出来ないはずなのに、その人懐っこい雰囲気は何故か味方だという言葉を納得させてしまう。
「黒羽さん…」
「うー。黒羽くんて呼んでー」
子供みたいに嫌そうな顔でむくれた。
年上に「くん」と呼ぶのは気が引けるが、本当の年齢なら年下だか

ら問題はないのかもしれない。

「黒羽くん」

「なーに？」

「私聞きたいことが沢山あって…」

ふと黒羽くんの顔つきが変わった。

「時間切れみたい。また会いにくるから」

「え…どういう」

「6丁目はあちらですか。どうもありがとうございました」

黒羽くんは声色を変えて私に頭を下げた。
それは別人のよう。

「今日の0時にベランダに出て」

小さい声で素早く言うと、来た方向へ何事もなかったように歩いて行った。

「哀？」

後ろから声をかけられた。
今度は本物の工藤くんだった。

「どうした？」

「…ああ、いえ。道を聞かれただけよ。事件は終わったの？」

「おう。あっと言う間にな」

犯人がわかりやすい証拠を残してくれて…と工藤くんは事件のあらましや被害者、犯人などの人物像、推理した事など事細かく生き生きと語り出す。

こういう顔が1番工藤くんらしい。

喋る工藤くんを促しながら家の中に入る。

（黒羽快斗。

彼は一体何者なのか。

灰原哀と彼はどんな繋がりがあったのだろう…）

振り返る空は茜色をしていた。

「哀」

夜も深くなって来て、今日は早く寝ると、寝室に向かおうとした私に工藤くんが声をかける。

「何？」

「明日さ蘭に呼ばれてるんだけど。新出先生家にいかねーか？」

「…え？ええ」

頷くとニッコリ笑ってキスをしてきた。

「おやすみ」

「…おやすみなさい」

ズキンとまた胸が痛くなる。

「・・・・・」

寝室の部屋のドアを閉めてベランダに向かう。
時計の針はもうすぐ、てっぺんで重なろうとしていた。

ぼんやりとした月が頼りない星の間に浮かぶ。
しばらく空を眺めていると、そこに小さく何かが動いた。
それは近づいて来る。

「鳥？」

いや、違う。
白い物体。
あれは人だ。

「怪盗キッド…！」

「こんばんは。お姫様をさらいに参りました」

「どうして…？」

颯爽と降り立つ姿は紛れもなくあの怪盗。
白いマントがふわりと揺れた。

「あなた…」

「行こう」

ちらりと隣の工藤くん部屋を見て、掌を上に向けて私に伸ばしてくる。

「・・・・・・」

微笑む彼に躊躇する。

「さあ」

その手に、そっと手を添えると一瞬にして私は空の上にいた。

ハンググライダーで怪盗キッドと空を飛んでいる。
都会の夜景が眼下で流れていく。
私達は闇に紛れ、工藤邸が後ろで小さくなっていった。

２２．白い翼（後書き）

キッドは良く知らないキャラなので本人と違うかもしれませんが、大目に見てください。
物語上出してしまいました。（読んでる時はそういうの好きじゃなかったのに…おかしいなー）
今、他に話が生まれてしまいそちらに気を取られています。
この連載が終わったらと投稿したいと思っていますが…。
もう少しこの話は続きます。
気長にお待ち下さい…て偉そうですみません。

読んで下さってありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1273m/

十年後

2010年10月14日02時22分発行